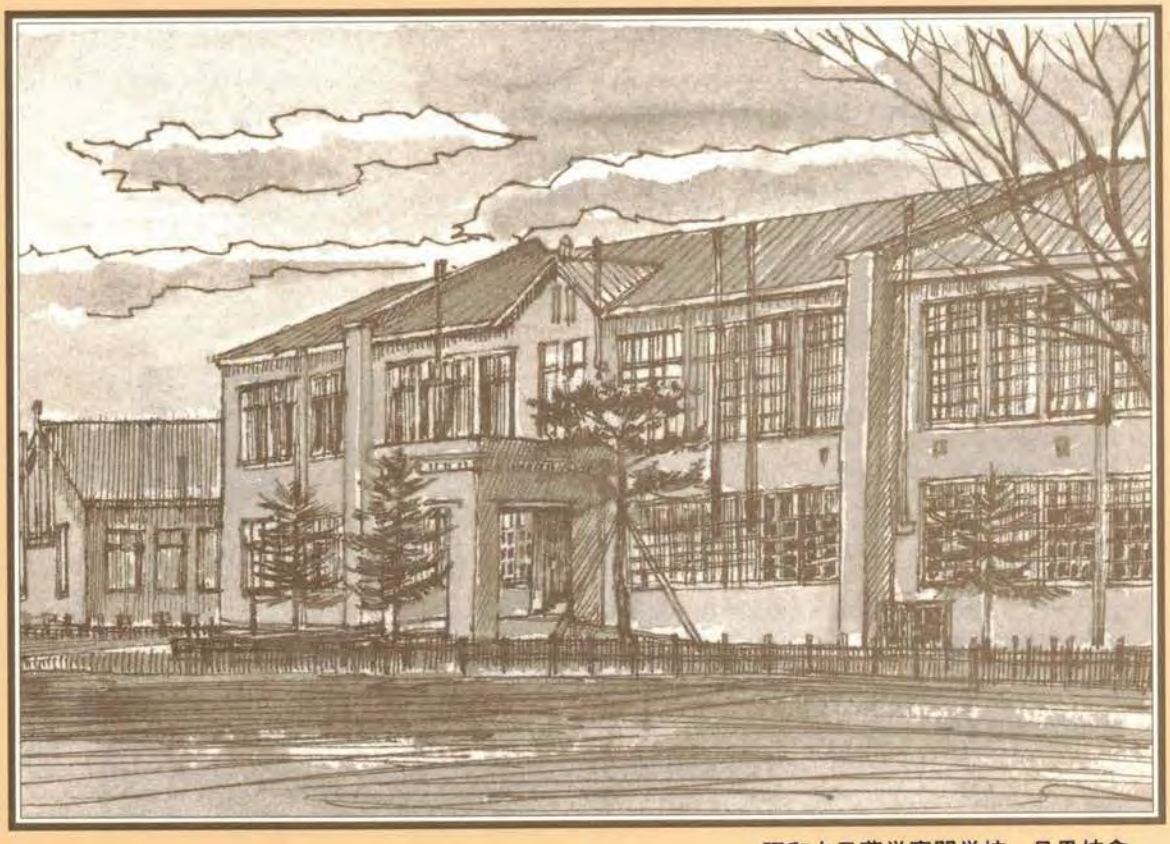
昭薬同窓会35周年記念号
1995年10月14日

母校のあゆみ

母校創設より昭薬同窓会誕生まで



昭和女子薬学専門学校　目黒校舎

昭薬同窓会創立35周年にあたり
建学の精神の伝承と大学の発展を祈念して

昭薬同窓会 会長 宮澤 一成

平成2年に同窓会会長に就任以来、支部の強化と卒後教育の充実を重点課題とし活動をして参りました。この事ははからずも時代の要求と一致し、現在は昭薬同窓会と昭和薬科大学により昭和薬科大学公開教育講座運営委員会が設立され、公開教育講座が開催されています。大学の全面的なバックアップがあるとはいえ、同窓生の皆様方の御理解と御協力により毎回盛況で13回を数えるまでになりました。今後は地方支部での研修制度を本部としてどの様にバックアップしていくかが課題であると考えています。

今年は昭和薬科大学創立65周年、昭薬同窓会創設35周年を迎えますが、この度昭薬同窓会が生まれる前の建学の精神に燃えた諸先輩方の御苦労の記録を整理し、後輩に伝えていく為に小冊子を発行する事にしました。この小冊子を読まれて新しい情報や、当時の思い出話、写真等がありましたらお知らせ下さい。将来、昭薬同窓会40周年記念誌の発行に、より良い記念誌ができる様皆様の御協力をお願い致します。

渉外・事業 副会長 呉 明子

昭薬同窓会は昭和35年8月に創立し、昭和37年7月発行の“昭薬同窓会会報”は、創刊号以来今日まで69号を数え、それには同窓会の充実した内容とともにその記録がつぶさに紹介されています。

しかし、母校創立以来、そこまでの約30年間の同窓会は、確とした記録もなく、同窓会はあったともなかったともいわれて、「幻の同窓会」でありました。

他方学校の創設は、当時の先輩諸姉とそれを支えた教授たちの、ドラマにも似た誕生の歴史があり、その後も紛争や戦災の幾多の困難を卒業生・父兄・教師職員が協力して乗り越えてきたことが伺われます。しかしこの時代を証言する方々は既にご高齢に達し、この記録をまとめるには、今をおいてしかないと思われ、これらの時代にスポットを当ててみました。

母校悠久の歴史の途上にあるものとして、先輩たちが活き活きと生きた学園時代を紹介し、その中に流れる建学の精神を継承していくよすがとなれば幸いです。

昭和女子薬学専門学校の校章と制帽及び校旗(戦災で消失)

昭和薬科大学創立65周年にあたり
学校創立30年までの同窓会記念号発刊を期待して

学校法人 昭和薬科大学
理事長 **上田　博之**

本年は、昭和女子薬学専門学校が創立認可を得てから65年、昭和薬科大学が生まれてから45年の節目の年に当たります。昭和薬科大学にとって世紀の大事業であった町田キャンパスへの移転を無事完了して5年余、新キャンパスは予想を遥かに越えた素晴らしいものであり、学部志願者は年々増加し、より成績の良い学生が入学して参りますし、良く勉強するようになりました。一方、大学院も論文博士が誕生して完成致しました。このような時期に卒業生の皆様と昭和薬科大学の隆盛をお祝いできることを心から嬉しく思います。

更に、本年は専門学校と大学の同窓会が合併して、昭薬同窓会が発足して35年になる年です。今日の同窓会は50の支部を擁し、大学運営を支持する機関として十分な機能を発揮していると敬服しております。現在、学校が創立されてから30年間の歴史を、できるだけ多くの先輩方に確認して整備されるとのことで大変意義深い計画であり、本学の今後の発展に資するところ大であると確信してご挨拶とします。

昭和薬科大学
学　長 **飛永　精照**

昭薬同窓会以前の同窓生に関わる沿革史が発行されると聞き及びましたので、一言期待のご挨拶を述べさせて頂きます。

昭和35年に発足した昭薬同窓会は、歴代会長ならびに役員の方々の並々ならぬご努力で素晴らしい大学同窓会に発展し、現在は一万二千名を超える卒業生の拠所として厚い信頼を集めていることは、母校の職員として誠に心強く思っているところです。

昭和35年は私が本学に奉職した年であり、それから今日に至る本学の歴史を振り返ってみますと誠に波乱に富み激動の月日であったように思われます。昭薬同窓会も大学同様その間紆余曲折が多々あったことと思われますが、今に及んで振り返れば発展のためへの道程であったと見ることも出来ましょう。

更に二十数年のそれ以前の卒業生の歴史があるわけで、それを記録として将来に残そうとする試みは、『温故知新』そのもののためであり、誠に有意義な企画と考え期待している次第です。

昭和薬科大学の校章と校旗

世田谷校舎図書館

I.母校誕生のころ

（昭和4年～5年）

母校の誕生は先輩諸姉の活躍で

緑に囲まれた多摩丘陵の一角、近代的なモチーフの校門をくぐると、広くゆるやかなスロープの石畳の右側の植え込みに、昭和5年母校創設時の卒業生が寄贈した「やまもも」の木が立っている。

やがて突き当たりに、目黒の校舎から焼けのこって移植された黄揚の木が見えてくる。その正面に空に大きく吹き抜けたロータリーの屋根の上に4階建の校舎が左右に開け、この広々とした約52,000坪のキャンパスを三々五々に行き交う学生たちの姿は、平和そのものである。

しかし65年の昔には、校舎もなく、集まる場所もなかったこの大学の創設の頃があった。

私たちは、ここにその開学の頃、活き活きと生きた先輩たちの奮闘の歴史をひもとこう。

悲願の専門学校昇格

350名が東京女子薬学校を退学して昇格をめざす

昭和の初期、世界的経済大恐慌が起こり、都会では失業者が溢れ、農村では、子女を売り、生まれた子の間引きが行われたともいう。当時は貧富と男女の差別は著しく、昭和20年終戦まで女子には参政権もなく、旧制の高等学校、大学に入る資格もなかった。（旧女子大は専門学校令）

薬学でも男子は既に検定試験のない3年制の薬学専門学校があったが、女子には、各種学校格付けの3年制の薬学校があり、卒業後検定試験を受けて薬剤師の免許をとった。検定試験はききしにまさる苛酷な試験であり、合格率40～50%。3年卒業後やっと試験に臨んでも、当時の情勢では、病魔にむしばまれ他界したり、経済的に立ちいかなくなり、資格取得直前にして志を中断されるものも多かった。このような状態だったので、女子学生にとっては、専門学校昇格は悲願であった。

そこで当時、東京女子薬学校では、在校生、父兄、卒業生等幾度もの熱い会合を重ねた末、昇格のための準備が整い漸く昭和4年12月13日に第1回昇格実行委員会決議録が作成され前途は希望に輝いていた。

当時の学生の代表は、

3年生新海うつの（Y－1），2年生前田松子（Y－2），四尾ミツエであった。

しかし程なく名誉校長の約束不履行に遭い、落胆余りにも大きく、生徒たちは思い詰め、昭和5年1月日本の女子教育上特筆すべき、学生総数350名総退学という挙に出たのである。

学生たちは直ちに麹町区役所の2階で父兄会を持った（欠席父兄からは委任状をとった）。

父兄たちは、「どでかいこと」を仕出かしたわが娘たちに驚き、そして今後の収拾策を心配して駆けつけ、学生たちもそこに同席した。

東京女子薬学校卒業生の西田満枝の演説に始まり、新海うつのが総退学に至る過去および現在の諸般の事情を40分にわたって累々述べて、深慮の行動であることを訴え、理解を乞うた。場内には、涙を拭く姿もあった。

◆◆◆

父兄たちは先般、昇格運動に歩調を合わせてきた実情もあったので、憂慮しつつもわが子たちの味方となった。

各学年の父兄は、早速、弁護士を交えて昇格に向かって動き出した。

Y-1 新海うつの

東京女子薬学時代(薬用植物見学)

先ず昭和女子薬学校の設立をめざして

創立準備金1人200円をきめて活動

工藤祐治、杉野森太郎、瀬原文義、三上千代子、堀内貫一、佐藤左近の6名の教授たちは、退学した学生のこれから直面する事態を捨ててはおけず、総辞職して面倒をみることになった。

そんな中にも、その年の検定試験は間近に迫っていた。そんな折り、教室のために岡田美枝子が赤坂の木造平屋の演劇場を借りてきた。そして6人の教授が無償で試験対策を行ったのである。

記録によると昭和5年7月に卒業後、9月に国家検定試験の実施、10月に実地の試験が行われ10月30日に合格発表、申請により12月内務大臣の薬剤師免許がおりている。(Y－1三浦フミ)

そして新宿区幡ヶ谷にあった小人数の日本薬学校に先生の世話で昇格条件を満たすため、臨時に席をおいてのち、合併して昭和女子薬学校設立の運びとなるのである。

学生たちは路頭に迷い、自分の学校もなく、集まる所もなく、清水谷公園(奇しくも現在毎年謝恩会の開かれる赤坂プリンスホテルに隣接するホテルニュー大谷の前)を情報伝達の集合場所と決めた。

何とかしなければならないと3年生の新海うつの、影山とよ、池田峯子の3人は先ず、閉校して空き家になっているとの情報のあった五反田の星商業学校々舎に的を当てた。

そして持ち主の星製薬社長星　一(作家星新一父)に相談に行くと、視野の広い人で、アメリカの滞在も長く、女子教育に理解があって「大人には貸さないが、貴女たちには貸しましょう」といってくれた。3人は一転、欣喜雀躍。ことの成り行きを待っている学生たちのいる清水谷公園に急行。今まで八方ふさがりばかりの中でのこの朗報に、皆抱き合って泣いた。下級生は結束の団子を買っておいてくれた。

折しも、学生の赤化事件が起こり(昭和8年5月)総退学は新聞沙汰になり、新聞社に説明に行ったが、なかなか理解してもらえず、各方面に交渉に出ることになり、新海、前田他幹部には、警察の尾行がつく事になり、訊問されたり、留置された学生を、教授が貰い下げることも起きた。

他方父兄や先生の骨折りで、昭和女子薬学校申請書を東京府庁に出したが、総退学した学生の新

4・30　昭和女子薬学校発展的解消
志願者75名　在校生278名
4・11　第1回専門学校入学式44名
6・3　昭和女子薬学校第2回卒業生42名
12・16　米倉昌遠校長就任
理事長　杉山義雄
11・15　昭和女子薬学専門学校認可
11・14　首相浜口雄幸狙撃される
10・　第2回国勢調査人口
64、450、000人
校当年に振り分ける。
48名の1～3年の生徒を専門学
杉野森太郎
高木正年　杉山邦雄
設立者　杉山義雄　中村継男
理事長　杉山義雄
10・15　財団法人昭和女子薬学園認可(寄付)
るため、学校に残る
専門学校昇格目的達成の面倒をみ
(国家試験合格者)その内51名は
7・20　昭和女子薬学校第1回卒業生95名
寄付金拠出者で構成された)
本校学生会・父兄会・教職員会・
会長杉山義雄会長杉野森太郎。
7・　昇格他資金の募金にあたる。名誉
昭和女子薬学校期成会結成(寄付
昇格運動当時の様子が伺われる)
・6・7　昭和女子薬林(新聞第1号発行される
昭和5・4・　星製薬商業学校校舎において授業継続

校設立は悪例を残すと却下される。復学の切り崩し運動が、ますます盛んになる中、申請却下は全学生を動揺させるものとそれを皆に告げるべきかどうかと新海は弁護士に相談に行った。「自分の責任でやるように」といわれ、真実を告げるべく決心して大会を開くが、父兄の中には動揺も出る。その時先生方が「昇格運動の先頭に立った学生は復学不可能である。寝食を忘れ、勉強を犠牲にして東奔西走した学生を捨てるわけにはいかない」と主張し、もとの薬学校への復学は沙汰やみとなった。

ことなきを得て創立準備金として350人の学生に1人200円を拠出してもらうことになる（後述）。国民白書で月額14円余りの不景気の最中、200円は父兄にとって大金であった。事情も事情、寄付は一片の通知で集まるものではない。学生は手分けして、全国行脚をすることになる。

北海道行脚を担当した影山は握り飯をもって、たどりついた道内の港町では、にしん漁の不漁で町は死んだようで、世間知らずの学生は、東京の学校に子女を出すからには余程の裕福な家庭と決め込んでいたが、子どもの教育に一家を託して勉学にあてていることを知った。とにかく分割可ということで各学生の家をまわって、募金額の目的に近づけた。

他方在京の学生田中リン、松永千鶴江等は、ベルツ水（当時多く使用されていた化粧水）を作り60銭で売りまくって、雑費諸費用にあてた。またカンパコンサートの切符売りなどもした。

専門学校昇格にむけて

熱意が通じて文部省が昭和女子薬学校を認可

昭和女子薬学校設立、合わせて専門学校昇格陳情のため、学生たちは手当り次第人に会いに行った。文部省に陳情に行ったら、「貴女たちは裁縫学校と同じ各種学校だから東京府庁へ行きなさい」。

安達謙蔵内務大臣へは15人程で押しかけたら、「筋の通らんものは許可できん。女のくせに何をしとるか」。小泉又次郎逓信大臣「国家試験が難しいからそんなことをしているのでしょう。そんな暇があったら勉強しなさい。しかし貴女たちのことは自然にわかる時がくるでしょう」。永井柳太郎文部大臣は「北極の氷も太陽の熱でとける。貴女方の熱意で氷をとかしてごらんなさい」。しかし結局は認可の申請は不許可になった。新海は医師斉藤龍三の紹介で第1回国会開催以来国会議員を続けている清廉潔白、人望厚い高木正年のところを尋ねる。日本の女子教育に深い理解を示し、翌日早速文部大臣のところへ新海と影山を連れて行ってくれる。お陰ですっかり風向きがよくなり、一方、先生、父兄からのつてで中村継男国会議員

昭和6・6・2　目黒区五本木2607番地に

7・7　同校校友会誌「りんだう」創刊号

6・5　昭和女子薬学専門学校校友会設立

2500坪の土地獲得

発行（校友会学芸部発行）

師の需要旺盛となり、誇り高き専門学校となった時機だった。

国民の眼が海外に向けられ医師・薬剤

9・　満洲事変起こる

11・　東北地方飢饉

7・2・9　井上順之助（日本銀行総裁浜口内閣蔵相）暗殺

3・1　満洲国建国宣言

3・5　団　琢磨（三井合名社長）暗殺

3・28　昭和女子薬学専門学校第1回卒業生88名

4・1　佐々木　元校長就任

4・　入学生61名　受験者数111名

5・15　犬養首相狙撃される

全生徒（専門科含む）276名

6・20　目黒区上目黒五本木に新校舎（1132坪、竣工費10万2000円）

7・7　期成会各理事寄付金活動を強化ならびに生徒寄宿舎竣工し移転

12・17　薬剤師法第2条による文部大臣指定申請につき第4学年及び専修科（校舎建築計画のための募金活動）

生徒は外国語学校において文部省施行の学科試験を受ける

の口添えがあり、昭和女子薬学校が漸く許可される運びとなった。土地、校舎の方も、永井柳太郎、慶松勝左衛門、大麻唯男らの有力議員の口添えで実施可能となった。さらに高木正年、中村継男、斉藤和子（父兄）より商工会議所副会頭大日本印刷社長杉山義雄（S－13岩本節子祖父）を紹介され財政面の解決がつくことになる。

このようにして20才そこそこの女子学生の一途な情熱はめげることなく、その行動を支えたよき師、温かな父母に見守られ、多くの周囲を動かした結果、建学が成就するのである。

この精神はそれ以後さまざまなトラブルを協力して乗り越えていく原動力となっている。

新海は当時を振り返って50年史にこう語っている。「私の一番心配なのは学生たちの結束が崩れることでした。私たちを教育して下さった教授たちの当時の苦悩の深さを知り、申しわけなく思っています。」

II.専門学校昇格運動
（昭和5年～8年）

昭和5年7月、従来の父兄実行委員会を昭和女子薬学専門学校昇格期成会と改称し、本格的な募金活動が始まった。学校の財政が逼迫する中、専門学校昇格のために必要な国庫納付金35万円也がとりあえず必要となった。学校関係者の寄付は一口50円、生徒一名の父兄に200円とし、全国的に父兄、卒業生を家庭訪問して、拠出金勧誘に当たった。学生の中には父兄に代わって卒業後働いて返す約束で、借りて納める者もあった。他に賛同篤志家には、金額に応じて名誉・特別・通常会員に分けた。また大口として、杉山家（本校理事長としてその基礎づくりに全力をあげて、苦難の道を歩まれ、父子二代にわたって貢献されたことは本校の躍進とともに不滅の光を放っている<40年史記載>）より10万円ほか公社債、土地（千葉）の寄付があり、初志目的へと向かっていた。

そして遂に昭和8年3月、指定専門学校になった。それを機に期成会を後援会と改めた。校舎、寄宿舎、設備など学校の財政は困難を極めていたので、指定に伴う付帯条件を遂行するために更に募金の実行強化を図っている。

専門学校昇格の祝賀会会場となった星製薬の講堂。

星校舎時代の学生の青春歌

“東京行進曲の替え歌”

星製薬の　あの窓あたり
イオンのロボット　思案顔
あなたアルカリ　私は酸よ
恋の中和も　ままならぬ

（ロボット:星製薬からきた原田先生の
ニックネーム&ペンネーム）

III. りんどうの時代

（昭和6年～11年頃）

青春の讃歌

学校経営陣が東奔西走している中、昭和6年6月には校友会が誕生し、7月には校友会誌“りんどう”が発行されている。校友会学芸部の編集で、B5サイズ、148ページの写真入り、昭和12年（頃）9号まで確認されている。そして代々この編集にたずさわった卒業生たちは、指導教授のもとに情熱を傾け、当時学生だった卒業生は“えっ！りんどう、なつかしいわぁ”と楽しかった日が蘇ってくるようである。

当時の社会でのエリートである教師や女子学生の才能が発揮された雑誌で、学校でのさまざまの生活が偲ばれ、先生方も多く投稿されている。

因にここでその目次を紹介しよう。

目　次

創刊に際して	俳句
信仰に就て	映画「独逸薬局」を見ての感想
哲学の素猫	随想　四十題
覚え帖より	校友会設立に際し
モルヒネ抄	昭和女子薬学専門学校校友会会員
所感　漢詩二編	母校消息
冬より春へ	体育部より
近詠	本校新校舎設計
短歌	本会会員住所録
詩	校友会役員氏名

S－7　植物採集

角　帽

昭和8年角帽が制定される。当時は高等学校進学者すら多くなかった中、房のついた角帽は医学、薬学の女子専門学校（当時は女子大は専門学校令）のみの校帽でエリートの象徴であり、通学の途上でも人目を引いた。

見　学

◇三共品川工場　◇朝日新聞　◇東京中央市場、理化学研究所、硝子器製造工場、陸軍糧秣本廠、花王石鹸柳島工場、明治製菓川崎工場　◇小金井津村薬草園、野田キッコーマン　◇慈恵病院、東京科学博物館、東京中央放送局、警視庁、上野錠剤所、東京帝国大学付属病院薬局、同血液関係、他

植物採集

◇茨城県水海道、群馬県桐生市、東京・神奈川・埼玉・千葉近郊

修学旅行

◇伊豆大島三原山、水郷めぐり、富士五湖、佐渡村山貯水池、箱根伊豆方面、鎌倉江ノ島方面、銚子、鹿島神社、筑波山、大山、他

語　学

戦前はカルテや研究文献はドイツ語であったため、教科書や映画にでてくる歌は集まるところ原語でよくうたわれた。帰路の車中でドイツ語の会話を使うなどした。因に1年生の外国語の時間は学則に従うと、毎週の授業時間について**昭和8年**ドイツ語5時間、英語1時間。**昭和18年**　ドイツ語6時間、英語2時間、他にラテン語1時間。**昭和24年**（戦後）ドイツ語3時間、英語4時間であった。

映　画

戦前はテレビがなかったので、この時代の学生生活をつなぐ唯一のコミュニケーションは映画であった。次に懐かしい題名を紹介する。

未完成交響楽　外人部隊　会議は踊る
街の灯　制服の処女　巴里祭　三文オペラ
巴里の屋根の下　モロッコ　望郷
リリーマルレーン　オーケストラの少女
モダンタイムス　舞踏会の手帳
カサブランカ　キューリー夫人

替え歌

当時の先生に親愛をこめてつくる

「りんどう」が冊をかさねるに従い、社会情勢も少しずつ落ち着きを見せ、学校は内容の充実に向かって活発な事業や各行事を行っている。学園は陽気充満。戦争勃発までのこの頃の学生は、学校が入学生を募集するために招聘した東京大学出身や爵位をもつネームバリューのある教授や講師達の薫陶を受け、青春を謳歌している。特に寮生たちは経済的に恵まれ、父母からも解放されて、のびのびと楽しい想い出を残している。ともあれ学園は閉鎖された時代の“若き女性の園”であったから、高度な学問を授けてくれる教授陣は憧憬のまとであった。長い年次にわたって受け継がれた教師に対する歌を紹介していこう。

当時の先生方の授業情景からその面影を彷彿とさせられる。

“東大卒の教授どの　生徒は遊ぶ　皆怠け者”

－当時の学生の歌－

何時も優しい吉川さん
裁判化学ではいじめられ
裁判化学　吉川　倭夫
（考え方がスマートでしかも純粋そのもの）

皆に聞き取れぬお布施さん
山形弁の早言葉
定量分析　布施　雅夫
（お国訛りは聞き取りにくかったが、お人柄がよかった）

二人暮らしの原田さん
いつも生真面目天秤衡
定量分析　原田　正夫
（几帳面真面目一点張り）

黒板たたいて楠瀬さん
酸化還元日が暮れる
分析化学　楠瀬　秀雄
（謹厳、微笑の記憶はなく、出席簿順に成績を読み上げた）

無理は言わぬと工藤さん
どれも重要　最重要
調剤学　工藤　祐治
（しどろもどろの工藤さんで知られているが、公私ともお世話になった卒業生は各年代にわたって数しれない）

人に知られた校長さん
海軍仕込みで〝要するに〟
校長　山羽　貞夫
（授業中に何度〝要するに〟を言われたか数えた）

机に半腰　栃内さん
ハンサムマンでチョットいける
微生物学　栃内　寛
（長脚をブラブラ、ちょっとニヒルな感じのハンサム）

さまあみやがれ　金歯が光る
ホルモンタンクの平野さん
有機化学　平野　四郎
（活気にみちた講義は長い年代に亘り忘れ得ぬと評判）

何と嫌らしい穂波さん
肩をたたいてネエーあなた
無機化学　穂波　初臣
（試験の範囲は教科書全部といわれ苦労、流行最先端の青い背広に枠な噂もあって学生のお洒落に理解があった）

声はテノール楫山さん
授業時間は関西弁
衛生化学　楫山　庸吉
（ロマンチストで写真家でもあった。厳しかったが放課後は文学や音楽の話をよくしてくれた）

薬草講義の杉野さん
お腐丸出し　根は坊ちゃん
植物学　杉野　森太郎
（ユーモアと機知にとんだ講義、着るものに無頓着で植物の幼根のことを幼い坊ちゃんと表現されていた）

昭和女子薬学校時代の思い出

Y－1　昭和5年7月卒

◇卒業後すぐ10月の薬剤師検定試験に合格、昭和6年1月頃より、東京帝国大学医学部付属小石川分院に入った。

S－4　昭和10年卒

◇入学当時は星製薬の校舎で、東大から刈米達夫講師、石館守三教授、近藤竜教授陣や子爵校長米倉昌達、子爵綾小路護（法制経済）、吉井千代田（薬制、歌人子爵吉井勇の弟）などの教えを乞い、文部省試験は目黒の校舎で受けた。4月より母校の助手となり、大根のビタミンB、C含有の手伝いをして、定量分析、無機化学担当で初任給25円。

S－5　昭和11年卒

卒業後母校の助手になり、初任給32円だった。9年9月には牧野富太郎博士の同好会で久里浜に植物採集に行った。

ベニスの商人

寮　歌

庭に茂れる百年の齢保てる老柘植と、
撩乱と咲く丘の上の老木桜を眺めつつ、
ああ楽しき哉　我寮舎、
懐かしき哉　我寮舎
此度起き伏し集いする、
我等幸は限り無し

S－6　昭和12年卒

◇授業は午前中が講義で、午後は実験で年に数回の見学や植物採集、修学旅行は思い出深い。

◇寄宿舎桜寮にいて、昭和12年満州国皇帝が来日されて、蘭寮ができた。昭和11年二二六事件は、3年生の時だった。高等女学校時代の教え子の石井耀子教授の母校在任は嬉しい。「りんどう」は4～7号の編集。薬剤師免許証は内務大臣と衛生局長の二人の捺印がある。

S－7　昭和13年卒

◇推薦入学制度があり、入学して学芸部でもっぱら「りんどう」にかかわる。卒業時、当時の流行のグレイのスーツを着て、警視庁（内務省免許のため）に免許証を取りに行った。病院勤務初任給40円。教員免許では昭和15～19まで青年学校看護婦養成で調剤学講義。　◇本校助手、薬用植物、生薬担当　給料30円。舎監　20円。

◇寮生活は、この上もなく楽しく、舎監の眼を盗んでは、一番遠い部屋に集まって、消灯（10時）後食料を運んで宴会をしたり、外に下宿している友人のところへ押しかけた。寮の隣家の塀の上でしつこくラブコールする他大学の男子学生にバケツの水をかけたりした。小径をまたぐ薬草園の両脇の背の高い薬草を結んで杉野教授が足に引っかけるのを喜びとしたり、いたずらの考案に枚挙のいとまがなかった。

◇卒業後、諸般の事情で度々就職の相談に学校を訪れた時、就職係の田淵満寿子（係長）は非常に親切に社会の情勢の説明とその都度地図を広げて、案内してくれ、世話を受けたことは忘れ難い。

◇予餞会（卒業生を送る会）には、“ベニスの商人”を独乙語で演じ、法衣は理事で弁護士の鍛冶良作理事に借りた。

当時の寄宿舎

Ｓ－８　昭和14年卒

部活動が盛んで、総務部は工藤教授のもと地味に運営、学芸部の菊盛教授は、専ら“りんどう”出版に力を入れ、原稿募集のビラを廊下等にはった。また有名な映画監督五所平之助を招いて、映画の紹介、批評、観賞について座談会をもち、当時は映画全盛（別記）で、映画主題歌は、英語・独乙語でよく歌い、今でも空んじている。

音楽部は音楽鑑賞会を開き、ピアノを習いたい人を募集して、先生の指導を受けた。当時は音楽会といえば、日比谷公会堂でレオニード・クロイツアーのピアノを聞きに行ったりした。入場料は学生、自由、一般席などあり、１～４円だった。

園芸部は杉野・布施教授のもと、和漢植物について学校で温室栽培、植物採集に行った。

写真部は椙山教授のもと現像から焼付まで指導を受け、当時優秀なドイツ製カメラ、バルダックを学校で一台購入し、写真撮影にでかけた。卒業アルバムの編集は頑張って作成した。

運動部は小沢、石塚教授のもと、バレー、バスケット、テニス、ピンポンなど大変盛んで東京女子薬専と対抗試合をしていた。

◇当時は７円で銀座で一晩遊べた。第６版薬事法（15円）を７円で質入れしてその資金とした。質入れは兄の役目で両親に○送れと打電したりした。昭和10年より地方入学試験場ができ、手伝いに行った。薬局初任給地方45円、東京50円

◇この頃管理薬剤師という言葉はなかった。

Ｓ－９　昭和15年卒

学生時代は小規模の家族的な学園生活で先輩・後輩と先生は親しく、二度とない青春を謳歌した就職は仙台東北大学金属材料研究所で、所長はＫＳ鋼の発明者、著名な本多光太郎（のち東北大総長）だった。初任給は50円、半年たって判任官55円となった。白金るつぼで電気分解して、金属鋼の中のＮｉ、Ｃｄなどの含有率の研究の手伝いをした。

◇先生の思い出として須藤先生の定性分析の講義は順序正しくわかりやすかった。菊盛先生のドイツ語に影響され、文学ドイツ語の対訳の本を探しに渋谷の宮益坂に通った。今にして思えば、その時間に勉強すればよいものを……。宮木先生は級友大半の憧れの的だった。就職は陸軍軍医学校で、学力不足で、帰って夜10時頃まで勉強していた。給料40円。昭和16年に広尾病院薬局に入ったが、戦災をまぬがれて、電話が通じたので、一時期同窓生の消息が集まった。日本アルミニウム東京試験所の給料は60円くらい。

昭和12年頃の銀座４丁目

◆◆◆

IV.戦争と学生生活
（昭和12年～20年）

軍靴の音

昭和12年に始まる中国盧溝橋事件以来戦時色が次第に濃くなり、楽しかった見学、採集、旅行は次第に勤労動員に変わる。実験薬品も不足がちになっていく。昭和16年太平洋戦争が勃発し、戦勝は束の間、山本海軍聯合艦隊司令長官の戦死を境に南の島々が次々玉砕陥落し、そこを基地に日本は制空権を奪われて、空襲が激しくなる。あとは全く無謀な戦いにいどみ、若い命が無駄に落とされた。

昭和12年10月近衛連隊内で第１回女子奉納射撃訓練に本校より20名参加。同第２回目は19名参加。Ｓ－９山中愛子が第１位を獲得した。またバケツリレー消火等防空演習が始まった。

第１回女子奉納射撃訓練

Ｓ－11　昭和16年12月卒

◇長閑な桜花満開の下の入学式、台湾、朝鮮、沖縄、九州、北海道、樺太から集まった新入生が、それぞれのお国訛り丸だしで会話を交えていたのと、布施教授も東北訛りでProtoplasm（原形質）を教えてくれたのが、印象的。６人のグループの衛生化学、レポート提出のため暗くなるまで励んだ。実験は牛乳一人一本割当たらなくなった。

◇太平洋戦争が始まり、戦時繰り上げとなり12月卒業、昭和17年１月８日陸軍技術研究所分光分析研究室に技術雇員、月給75円。３人で配属された。従来男性ばかりの職場だったので、初めは女性の対応に戸惑ったとあとで聞いた。白衣で３人で歩いていたので、三羽がらすとめずらしがられた。所内の科内教育は東大の水島三一郎教授の量子力学、Pipolmoment 他。しばしば防空壕に入っていたが研究所も疎開した。

◇寮生活は多くの人の繁がりを得て、非常に楽しかった。

7・7　日中戦争始まる（盧溝橋事件）

を中止した

で納入。納入極めて悪く、行動

たが会費は終身会費として20円

卒業生間に同窓会なるものがあっ

幹事＝卒業生、在校生、教職員

会長＝学校長

特別賛助会員＝教職員、財団役員

構成会員＝卒業生、在校生

7・　薬友会設立（会費6円）

3・20　第六回卒業生71名

12・3・8　関角之助理事長就任

12・2・6　第五回文部省試験（生薬学）

（法制経済学）の紹介

作曲近衛秀麿）講師子爵綾小路護

（作詞応募Ｓ５西田（伊藤）好子、

11・11　昭和女子薬学専門学校校歌制定

（定性及定量分析）

11・2・27　第四回文部省試験

卒業試験は一日繰り下げ

積雪30㎝　臨時休校

2月26日　二二六事件　帝都戒厳令

年間189円24銭

個人消費支出月棒15円77銭

城）各地元の卒業生は手伝う

3・25　岡、長野、富山、仙台、札幌、京

3・　地方試験実施（名古屋、広島、福

第四回卒業生31名

昭和10・2・7　第三回文部省試験（衛生化学）

◇寮行事恒例の雛祭りには、1年生が雛人形の衣裳を着て、雛段に並びお祝いをした（生き雛様）宝塚に憧れていたので、男装のお雛様になるのは嬉しかった。夏の夜は浴衣を着て、盆踊り、花火を楽しんだ。娯楽室ではトランプやおしゃべりに興じた。

寮のお雛祭り　S－7

S－13　昭和18年9月卒

◇昭和17年の秋、本郷にある理化学研究所へ見学に行った。そこには物理学の最先端の設備サイクロトロンがあった。しかし終戦直後の昭和21年11月米軍司令部よりサイクロトロン破壊命令が下りている。

◇昭和18年4月近所にあった海軍聯合司令部長官の留守宅（青山）辺が何となく人の出入りが騒がしかった。何ヶ月かたって国葬という発表があり、学校でも代表3、4人校旗をもって参列した。校旗は重く、ベルトを何べんもしめ直した。青山通りを大砲の上に長官の海軍々帽と軍服を載せ、長男（多分）を先頭にしめやかに行進する有様は忘れられない。長官は太平洋上空で戦死されたが、国民の動揺を慮ってすぐに発表されなかった。

◇東京帝国大学医学部薬学科勤務介補初任給55円

◇卒業後、陸軍造幣局（滝の川）後秋田県庁試験室勤務

介　補

当時、卒業後東京帝国大学付属病院薬局で研修する制度があり（無給）、研修後は模範薬剤師の証をもらった。他に付属病院や医学部薬学科などに就職もあった。それは介補（副手の前）として給料をもらった。

学徒出陣

昭和18年10月21日、神宮外苑競技場で東京近郊77校の学徒出陣式が行われた。本校にも壮行会見送りの要請があり、戦時短縮卒業で既に9月に4年生が卒業していたため、3年生が主になり寮生とともに約130名が参加した。東条首相の訓辞に始まり、数万人の学徒が次々行進し出陣して行ったが、戦争末期までに出陣した学徒総数は約300万人、大半は帰ることがなかったという。

この時のテレビ画像のスタンドの角帽姿は、私たちのもので確認される旧友の顔もあった。その日は寒い日で、雨の中、学徒や私たちの角帽は濡れ、身じろぎもせず、ただ涙、涙、涙……であった。

S－14　昭和19年卒

◇入学式の時、式は長い間待ってかなり遅れて始まった。あとで聞くところによると学園内紛争のためだったという。

◇3年生の予餞会（卒業生を送る会）には、“アルトハイデルベルヒ”を、入学生を迎える時は“ファウスト”を独乙語劇で演じた。大変緊張したが懐かしい思い出である。

ドイツ ハイデルヘルヒ城

S－15　昭和20年卒

授業は１学年より２学年（昭和17～19年）しか受けられず、実験は２学年の時多少あった。無試験入学だったが、試験を受けた人が多数あったことをあとで知った。校舎焼失のため卒業式はなく、卒業証書もない。薬剤師免許は昭和21年４月におりている。２年の昭和18年６月頃王子日産化学工場に見学。雨曝しの板の階段を何段か上がって10数名が上がった途端バラバラと数人が降ってきた。硫酸のパイプが切れ、火傷をした人が無我夢中でそばにあった防火用水の中に飛び込んだら、これまた発熱して大変だった。数名が入院し、期末試験はなかった。級友を広島原爆で亡くした。

農村勤労動員

招集令により男子をほとんどなくした農村へ、昭和20年６月地方動員令が下った。２学年から４学年までの昭和15～17回生は群馬県新田郡一帯の農家に田植え、芋掘り、麦刈り、雑草抜きと炎天下をブルマー姿で鎌をもち、ヒルの吸い口から血を流して、朝早くから日暮れまで農作業に従事した。

林の背後に立入禁止の中島飛行場があり、時折艦載機が来襲して竹薮に逃げ込んだ。また農作業中直前に特攻機と思われる飛行機に白い手拭いを振るよう指令があった。鹿島灘の敵の艦載機に体当たりするのであろう。二度と帰らぬ小数機の旅立ちを涙とともに見送った。夜の桑畑や利根川べりで友だちと星空を仰いでのコーラスは若い日の思い出の一こまである。

主な勤労動員先（各学年）

陸軍省恩賞課、陸軍衛生材料廠、陸軍造兵廠、三共製薬㈱、第一製薬㈱、陸軍糧秣廠、伝染病研、海軍技術廠、旭ガラスＫＫ、絆創膏工場

S－16　昭和21年卒

◇授業１学年、２学年（１ヶ月勤労動員）、３学年（４月校舎焼失から休校）、翌年１月から開始４学年９月卒業。

◇戦時中教授や講師たちは軍の委託研究に没頭しその研究の苦労や喜びとともに、当時まだ認められていなかった京都大学湯川博士の中間子（場による力）の理論やアインシュタインの相対性原理等、限りなく微小から宇宙の世界までの話の内容に科学への夢はふくらむばかりだった。実験は少なくなっていった。だが、Emile FishierやGatterrmann、Paul KarreのLehrbuch・Der Organischen Chemieをできる限り訳読するようにした。また東横線渋谷駅近くの小さな書店に毎週ドイツより運ばれてくる最新の文献を見に行った。菰田講師の研究は戦艦の船底につく貝殻が船を重くするため、貝殻のつかない塗料の開発、井出教授は

空襲で防火壁だけが残った目黒校舎の焼け跡。

海藻より繊維をとる研究と話された記憶がある。

◇終戦翌年1月から世田谷弦巻の軍のバラック倉庫で再開された授業は、オーバーコートを着たまま空腹と寒さでガタガタ震える手で鉛筆を握り、足は冷えたままであった。特急つめこみ授業に早くも3月末には試験。9月には卒業試験。無我夢中の勉学であった。食料休暇、短縮夏休暇には、それぞれ学校の世話や郷里の手伝で大学、病院、研究生、製薬会社、薬局等で実習している。

◇戦中の真っ只中に教育され、科学も思想も生活もすべて戦争に勝つためであり、国や天皇のため命を捨てることを喜びとした等が、8月15日の敗戦の詔勅で突然違ったものになり、9月25日の卒業式の答辞には何を書いてよいかわからず、困り果てた。

◇地方公務員（病院）月給550円（内500円）は新円切り替えによる封鎖で強制預金で支払い。

トタン屋根のバラック校舎に通学する学生たち
（昭和22年）

飢餓（食料難）

戦後の食料難は語るに尽きない。

◇弁当は九品仏付近の外食々堂で、お汁は飲んで中味のすいとんのみを弁当とした。

◇用賀駅から通学の途中、農家が畑先へ5㎝内外の落下した青く固いトマトを小盛りにしているのを買って飢えをしのいだ。

◇日曜日に舎監の目を盗んで、農村動員先で米を分けて貰い、寮の物干しで炊き出しをした。嬉しくて大声で歌をうたいまくり、どんちゃん騒ぎをした。

◇寮生の3人でお茶の水の日大の歯学部に歯の治療にいった。インターンの歯学生に“健康な奥歯の抜歯の経験がないと卒業できないんだ”といわれ、お腹が空いて仕方がないので、チョコレートや音楽会のチケットを交換条件で、健康な奥歯を提供した。その時の痛さはその時もらったチケットの音楽会“ハンガリア狂想曲”とともに忘れられない。

◇師走の折、上野駅から電車の長蛇の列に並んで、おいもの昼食をとっていた時、4～7才の浮浪の戦災孤児の汚い手が目の前に幾つものびていた。あの子たちは無事に育ったであろうか。

さて、昭和21年6月、文部省より全国の大学、高専に食料休暇の指示があったとかで6ヶ月学校は休みとなり、学生たちはそれぞれの地で研修をしている。

昭和13・1

1・19　第六回文部省試験（調剤学薬局方）

3・17　第七回卒業式

14・1・19　第七回文部省試験（無機・有機薬務関係厚生省に移管

厚生省新設、内務省衛生局より薬

15・

9・7　動労奉仕開始（9月9日まで）

綿糸配給切符制　賃金統制令　価品製造学）

格統制令　第2次世界対戦起こる

ドイツ、ポーランドに侵攻　小麦

・米穀・砂糖配給統制規則

1・12　第八回文部省試験（生薬医学）

11・14　評議員会にて理事5名出される

理事　戸田利兵衛　若山要二

坂井隆三　杉野森太郎　杉山一郎

12・14　理事会開催（評議員任期満了のため在京維持員会招集の件　12月21日と決議）

12・16　11月14日の評議員会で正式に5名の理事が選出されたにもかかわらず、桑原静江、山羽貞夫、工藤祐治、三浦盛吉氏財団を不服とし杉野森太郎氏を理事長印と共に所在不明とし卒業生を巻き込んで紛争を起こす。

16・1・6　杉野森太郎氏急逝する　その時山羽貞夫理事長印を所持

1・8　杉野氏葬儀

1・14　第九回文部省試験（無機化学）

戦　災

空　襲

◇昭和19年から20年にかけ、空襲はいよいよ本格的となった。当時は登校していても、敵機襲来の警報がなると授業は中止し、空襲警報になると電車より乗客は降ろされた。私も水道橋駅前の無蓋の防空壕に入り、何気なく次の壕に移動した途端、前の壕が機銃掃射をうけた。

◇同じ頃有楽町駅の壕で下級生２人が死亡した。また下校中、代々木で偵察機のＢ29が機首をもがれ、急降下、みるみる機体は大きくなり、車両の上を掠め、電車はぐらりとゆれて、新宿鉄道病院の裏に落ちて炎上した。夕刊は医院の一家が無くなった事を報じていた。この様に、この時代の学生たちは命をかけて通学したのである。

◇翌16日歩いて登校。まだくすぶっていて友人と手を取り合って涙を流した。在校生はその後三々五々母校の焼跡を見に行っている。

広島・長崎原爆

昭和20年４月15日、学校は消失し、広島の実家に帰ってきた。昭和20年８月６日、午前８時朝食中、突然白熱の閃光が走り、食卓のものも屋根も一瞬のうちに吹き飛んだ。わけのわからぬままとりあえず家族の安否を確認した。当時薬局を経営していたが、ある限りの無事だった亜鉛華とオリーブ油をバケツに投げ込み、皮膚がとけて爪のところでかろうじてぶらさがっている被災者に塗ったら、たちまち列ができた。一日位たって火が回ってきたので家を捨て、峠を越えて逃げたが、道端には人のうめき声と死体に最早うじが湧いていた。

父母は原爆病で亡くなり、後日学校より当時のことを聞かれたが、何も言うことができなかった。「助けて」という声とともに未だに悪夢はさめていない。他にも広島、長崎で被爆し、また亡くなった同窓生もいる。

東京・横浜大空襲

昭和20年３月10日東京下町の大空襲があり、そのまま学校に消息を絶ったり、死亡した学生が何人かあった。その翌朝、登校中地下鉄の渋谷駅で焼けて黒ずんだ顔の人たちの群がどんどん避難していった。４月15日に始まる第２次大空襲は、西北部環状線に沿って丸く先ず爆弾を落とし、次いでその中を碁盤の目に爆弾と焼夷弾の混爆を投下したという。◇母校も実験室の一棟を残して全焼した。翌16日在校生は線路伝いに歩いて母校の焼跡を見に行って友人と手を取り合って涙を流した。

◇当時寄宿していた小石川の他寮も焼け、火の中を死んでいる老人の死体等を乗り越えて逃げたが焼け落ちた家の土台に足を取られ、火の中に転んで足腰に火傷した。人々は、火柱の中を逃げまどい、めらめら、バリバリと燃える火柱は、さながら地獄絵であった。５月24日東京南部と山の手の第３次大空襲があった。

◇５月29日は、横浜の大空襲が朝から始まった。学校を欠席した私は母と妹２人を先に逃がし、火の中をあとで追いかけたが、関東学院の裏や、京浜急行黄金町駅付近の機銃掃射で多くの死体がころがり、母・妹の３人とも亡くしてしまった。

◆◆◆

S－17　昭和22年卒

専門学校時代では、十数倍の最も競争率の高い時で、入学した時はA、Bの2クラスあった。2年生の授業日数は57日だけで、成績表は公民、体操、理論化学、英語、道義、家政、香粧品化学、薬品製造学の8課目のみだった。

◇4学年の予餞会には独乙語劇「いばら姫」を演じた。社会情勢で3年間の短縮卒業であった。隣に厚生省の衛生試験所があったため、講師として多くの先生に授業を受けた。時折試験所を尋ねて実習などさせて頂いた。卒業後所内の試験を受けて入所。近藤　龍教授のもとで大風子の中の成分とサルファ剤を結合させ癩病の薬の合成をしていた。初任給511円で次年度はインフレで968円52銭。

V.敗戦と復興
(昭和20年～23年)

S－19　昭和26年卒

◇戦後の母校復興に中心的存在の学生たちである。(後記)◇"蟻の町のマリア"で有名な北原怜子(北原金司教授の娘)が卒業している。

S－20　昭和25年卒

戦災で焼け残ったオルガンがあった。生薬の木村久吉先生と放課後合唱をした。このオルガンの音は、学校創設の何もない頃、当時の理事長が学生々活にうるおいをと愛嬢たちのオルガンを寄贈された。こころの響きである。

世田谷校舎への移転

昭和20年に入ると3月10日の下町の空襲で空をも焦がす真っ赤な夜空、つづいて、4月15日の空襲による母校の校舎が焼失のあと、S18回生は、横浜の日本火工KKで入学式を行ったが、即動員でその場で作業を続けなければならなかった。やがて8月15日を迎えて終戦の詔勅が放送された。開校以来営々として借財を返済しつづけ漸くその負担から解放された矢先だった。

20年8月23日に復興の資金調達のために、復興後援会ができたが、世の中は終戦の混乱と戦災とで何から始めたらよいか身も心も整理がつかず、茫然自失。それは空から落ちてくる焼夷弾の脅威からのがれられるというだけであった。

しかし学校は生徒を受け入れるべき校舎と学生の宿舎を確保しなければならなかった。その時復興委員の山里尚行(父兄)の知人である加納主計陸軍中将と元薬剤中佐だった山羽校長が軍関係だったので用賀に土地を求めることが出来たという。

工藤教授はじめ関係者の努力で、昭和20年12月に元陸軍衛生材料廠跡(約1600坪、土地はGHQ管理下、所管は大蔵省国有財産部借地で払下げ金29,276円)へ移転することになったり、一方世田谷奥沢九品仏にあるアパートも買収することとなった。

昭和20年11月に文部省より復興補助金20万円を得た。昭和21年7月復興後援会を解散して復興助成会としたが、第一回の募金では5万円しか集まらなかった。しかし払下げの建物はバラックで辛うじて講義ができ、実習は目黒の焼跡の分析実習

昭和20・6・2　2、3、4年農村動員
6・16　戦災復興対策　復興委員に左記事項委嘱　1、復興の資金調達　2、疎開の件　3、学園の復興に関する一切の処置　世田谷区玉川奥沢町3－1－160に生徒寄宿舎用建物を8万円で買い受ける
8・1　入学式即動員(横浜市新橋町の日本火工KK工場においてそのまま作業続ける)
8・1　第1学年板橋第5研究所動務奉仕
8・6　動員下令　広島原爆投下
8・10　長崎原爆投下
8・15　終戦の詔勅放送される
9・23　復興のための合同会議(復興後援会設立)募金始まる
9・　戦時教育廃止

極東裁判

広田広毅の娘の姿が印象的だった。昭和21年4月3日に極東国際軍事裁判が今れ、何とも言葉には表せない気持ちが一杯で、立ち並んだ中で東条はじめ日本の戦犯が裁かの自衛隊市ヶ谷駐屯地で開廷。外国の国旗が

室で行われた。昭和22年目黒の校地、残存建物を30万円で売却し、用賀のバラック平屋の建物を50万円で売り、財団保有の国庫債券を担保に銀行で借入し、特殊預金、補助金、復興寄付金、土地担保借入金、地方所在土地売却等、昭和29年には私学振興会より復興資金の融通を受けるなど財団教職員、在校生、同窓生が一丸となって復興に力をつくした。

Ⅶ.新制大学昇格運動

(昭和22年～23年)

学生もアルバイトで資金あつめ

終戦を境に思想的にも180度の転換をして白が黒、黒が白になった時代で、戦後のきびしい状態の中で卒業後は生活するのに一生懸命で後を振りかえる余裕すらない時代だった。しかし学制の改正により昭和23年７月31日までに新制大学に昇格しなければならなかった。

認可基準に適合するため莫大な資金調達が必要で、それは非常な難事であり、そこで学校は昭和22年６月昭和女子薬科大学期成委員会を設立した。その規則は窮余の策であり、従来ならば学生として禁止条項のものであった。

◎寄付金の募集：音楽、演劇、映画その他芸能の会を催して収益を図る。

◎アルバイトで収益を図る。

◎バザーその他の事業で収益を図る。

生徒はアルバイトの方法として、３年生が10名１組となって、問屋より仕入れた各品目を下級生に卸し、その利潤を寄付した。取扱品目はサントニン、ペニシリン、ヨードチンキ、胴乱、試験管、石けん、スナップなどであった。売れ先の定まったものは僅かで、下級生の手紙は涙なしには読めなかった。(40年史，Ｓ－19) サントニンが誤解されてＧＨＱが本校に来たこともあった。

Ｓ－20　昭和25年卒

◇大学昇格の寄付のことで、昭和22年９月に１人3500円、３人で１万円の寄付の割当てがあった。

◇浅草橋のカジノとマウント品川で演劇ダンスパーティを開催。黒字２～３万円を学校に寄付した。パーティー券を50枚位売ったと覚えている。◇また、戦時中の勤労動員の報酬も学校に寄付された。

一方卒業生内でも、昭和女子薬科大学昇格期成会が設けられ、会長に影山とよが就任し、同窓生からも資金の寄付が行われた。

こうした努力で尊い浄財が本学に寄付され、その熱意と協力が実って、昭和23年７月30日文部省に大学設置認可申請書を提出するまでになった。

昭和24年２月21日昭和女子薬科大学として認可された。

◆◆◆

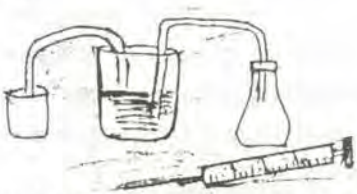
S－21 （D－1）昭和28年卒

専門学校3学年の時、演劇部で宝塚ものをよく演じた。ダンスが盛んで、東京工大からの安藤講師は人気があり、東京工大や農大の学生たちとダンスパーティーを開いた。

ダンスパーティー

◇在学中には堀江助教授の紹介で、東京大学付属医化学研究所に行っていたが、将来研究職につくには、大学教育が必要ということで大学昇格とともに進学して、第1回卒業生となった。

◇在学中の春冬休みの研修で、ストレプトマイシンやカナマイシンの発見者で有名な当時の伝染病研究所の梅澤俊夫博士のところで、各地の土壌より、新種の抗生物質を分離して培養する研究を手伝わせてもらった。



Ⅶ.昭和薬科大学発足

（昭和25年～27年）

昭和24年5月6日より24日まで新制大学の学生募集をしたが、定員80名のところ入学許可は12名にすぎなかった（別科生は16名）ので、昭和女子薬科大学を男女共学の昭和薬科大学に変更することを決議、申請して昭和25年2月8日昭和薬科大学設置認可を得る。

こうして昭和薬科大学は発足する。

新制大学発足の頃

通学の玉川線チンチン電車

D－1　昭和28年卒

昭和25年4月7日昭和薬科大学に入学したい一心からこの大学を訪れた。玉電用賀駅から大学までは農家が点在し、畑が果てしなく続く田園地帯だった。

私は古い木造校舎の大学に着くと、そのまま受付窓口に行き受験の意思を伝えた。

事務室から年配の男の人が出てきて私を「こち

◆◆◆

らへどうぞ」と正面入口を入ってすぐ左側の事務室に案内してくれた。

私は、室内にはいるとすぐ「ここの新制薬科大学を受験したいのですが・・・」と話すと、「ここの学校は今までは女子だけの学校でしたが、今度新制大学になったら男女共学になり男の人も受験できますよ」と言った。「入学試験はいつですか？」聞いた。その時明治大学商学部に籍を置いていた。私の学歴を聞いて「そもそも君が本当に入学する気があるなら、留年することなく新制大学の２年に編入できます」と説明してくれた。

具体的な入試の話におよぶと、今も保存してある1000円の検定料を納めれば、入学試験もなく入学できるという話だったので、1000円を支払ったら、「今ご飯を注文してあるから食べていって下さい」とのことで、やがて出前されたご飯をご馳走になり、入学試験もなく入学が決定した。

その後、入学金2000円、授業料12000円、実習費3000円、父兄会費1000円に雑費を加えて、合計18200円を納めた。領収書は昭和女子薬科大学となっていた。

修学旅行

◇昭和27年７月20日頃（４年生）修学旅行として10数名のクラス員が富士登山をすることに決め、精進湖でキャンプを張った。雨が降りだしたので、テントを撤収して付近の旅館に入ることにした。

朝２時頃雨も小降りとなったので旅館を出発、４、５合目頃になると暗い森の頂上には星が輝きだし、左右の森の切れ目からは下界の街々の電燈の明かりがきれいに見えてきた。しかし周囲はまだ真っ暗でお互いの様子は少ない懐中電灯の光でおぼろげであった。雨と霧で寒く皆一気に登った。疲れたので散らばり腰をかけていると夜が白々と明けてきたら、何と前方に山小屋が浮き出て、皆はその前に座っていることに気がついた。

寒さもあり、急いで小屋に入り、燃えるものを探し、暖を取り、各自の持っていた僅かな食べ物を分け合い談笑や仮眠もした。突然戸を開けて２、３人の男が入ってきた。お互いに驚いたが、山小屋の管理人だった。夏山直前の山小屋を開きにきたところであった。親切に食べ物をくれたり、暖を取らせてくれた。そして小屋の使用料が要るということで、帰りの電車賃を残して、皆で出し合って支払い、不足分は後日送金する約束ができた。河口湖まで送ってくれた。

帰宅後疲れもとれないうちに各自は山小屋からの請求書をもらった。“すぐに送金せよ”とキツイ催促であった。物もなく、食べ物のない時代に大きな想い出に残る修学旅行をしたものだとなつかしい。

◆◆◆

◇影山、新海、田中、木村、中津井、斉藤、梅本その他数人の先輩諸氏から在学生ではあるが、同窓会を手伝うようにすすめられた。これが同窓会とのつながりのきっかけになったが、最も印象に残っていることは、名簿作成を手伝わされた時で、それが具体的に出来上がり、その発行印刷に必要な資金が同窓会にないとのことで、資金の援助を学校に頼むということになった。当時学校側の組織はよくわからなかったが、このことに関して影山先輩などは最も苦心していたようだ。

バスケット部の学生たち

男女共学第一回卒業式
この卒業式を待って昭薬会発足

◆◆◆

昭薬会初代会長あいさつ

次代へのメッセージ

S－1　影山　とよ

思い出はなつかしく、追憶は楽しいと言われるが、しかし昭薬会の来し方10年を振り返ってみる時、その思い出は決して楽しいものでなく、むしろ重苦しい自責の砂をかむような味気なさを感じるばかりである。省みて再びこの愚を繰り返さないようにとしたためる次第である。

昭和27年旧薬友会を昭薬会と改称発足した。ただ一筋に会の健全な発展と会員のためにその使命を達成しようと腐心して来たが、種々の障害のみ多かった。かねての理想である昭薬会館の建設を具体化したくその費用にと保険のリベートを得る方法を実施したりしたが、当時の学校側の一部の反対でやむを得ず中断せざるをえなくなった。

一方同窓会はその組織力の弱さに乗ぜられ、開校以来の同窓会を無視して大学同窓会なるものを発起させるような不合理さえ行われ、その残念さは筆舌に尽し難く、ただ時の来るのを待つのみであった。やっと一つの軌道に戻り、昭薬同窓会として理想の実現に邁進できる態勢をえたことは、漸く溜飲の下がる思いがしたのである。

我々同窓会はつまらぬことは顧慮せずあくまで団結して、その使命を正しく認識し、健全なる発展を遂げていきたいものである。

（“昭薬同窓会会報”創刊号より）

（注：昭薬会発足にあたっては、薬友会よりの繰越金を引継いだ）

昭和薬科大学同窓会初代会長あいさつ

新しい時代へ

D－5　小林　　健

学校を卒業して社会人となって痛切に感じたことは、他校に比べ横の繋がりがなく、薬学会に出席しても昭和薬科大学だけが、同窓会の場がなく、肩身の狭い思いだった。昭和32年頃、当時の大学教授から大学卒業生だけの同窓会をつくる様示唆された。しかし大学に２つの同窓会があるのはおかしいということを申し入れたが、聞き入れられず、飯田好一、金沢輝栄、和田隆雄等と相談し、設立運動を開始した。

当時女子薬専の同窓会があり、いろいろトラブルを生じたが柴田理事長、荻原教授や先輩の牧野仁志氏、玉置真平氏、青島慧氏等の協力を得て、発足の運びとなった。総会当日二つの同窓会で騒然と議論が交わされ、結論的に一本化を図り、我々の同窓会は発展的解消ということになった。それが今日の同窓会の発展に貢献しいるかと思うと当時の苦労も無駄ではなかったと自己満足している。創立25周年（昭和30年）に学友総合雑誌「昭薬」を飯田好一、和田隆雄と発刊できたことの喜びは40年たった今も忘れがたい。

雨の中、風の中、各製薬会社、商店と足を棒にして広告取りに奔走、その時にも痛感したのが薬科大学でありながら製薬会社に「昭和薬科大学」の知名度が全くなく広告も取れず、大学の説明だけで終わり、思い足を引きずり暗い校舎に帰る途中３人で安酒を飲み嘆いたことを今でも忘れない。

12・6　学友会主催弁論大会（同窓会発行）
7・1　「昭薬同窓会報」創刊号発行
35・4・8　昭薬同窓会発足
34・4・10　皇太子御成婚
和薬科大学とする
9・22　学校法人昭和薬学園を学校法人昭
小林　健）
6・14　昭和薬科大学同窓会設立（会長
33・4　新制博士誕生
神武景気
原子力委員会発足
8・15　「昭薬会報」創刊号発行（同窓会誌）
31・4・10　襟章制定される
昭和薬学園となる
12・26　財団法人昭和薬学園から学校法人
12・19　「昭薬」創刊号（校友会）
大村能章）
昭和30・7・5　校歌試曲（作詞高橋鞠太郎、作曲

寮　生　活

D－2　昭和29年卒

昭和25年４月に昭和薬大は施設環境に大幅に見劣りする大学に多少引け目を感じながら学業に励しんだ。入学の仲間は学徒動員帰りなどで年齢差があり、男女共学になったばかりで、バラエティーに富みグループ化が進んでいた。大学３年に誠和寮に入寮した。当時から寮生は一種独特の雰囲気があって、私の性格も徐々に変わり、積極性も身についてきた。寮は学年別で一部屋６人で朝夕食は当番制で材料の仕入れ調理まで当番が行った。朝食の味噌汁に味の素をサッカリンと間違えて甘い味噌汁を味わされたり、男世帯なので、バラエティーに富むわけにはいかず、夕食などは当時安

誠　和　寮

かったイカの酢味噌和えが多かった。試験前になると皆が寝静まった後布団を出して押入れに机と電気スタンドを入れて夜明けまで勉強している者もいた。寮内では麻雀が盛んで売店の菓子を賭けたり、ボクシングの真似事をやったり、ラジオで広沢虎造の浪花節を聞いたり、ジャズが流行し始め江利チエミ、雪村いずみのカモンナマイハウス、テネシーワルツなどのジャズに合わせて合唱したりして、青春のはけ口を求めた。舎監が工藤先生だったが実務は奥さんで、陰で“バシタ”と呼んで口うるささのお返しに愛猫をいじめたりして溜飲のはけ口にしていた。

とにかく良いも悪いも青春の一頁として今の私の中に寮生活が残像として脳裏に焼きついている。

D－3　昭和30年卒

隣の国立衛生試験所に米軍の倉庫があって、米兵が剣付銃で立番、実験などで遅くなってから帰る女子学生を学生有志が白衣を着てガードした。

「昭薬」創刊

D－4　昭和31年卒

◎昭和30年冬、学友会誌「昭薬」を創刊する。担当は飯田、和田各総務委員会副会長、小林　健文芸部々長。表紙「昭薬」を衣笠学長に依頼する。費用は全くなく、荻原教務課長（教授）、清水学部長（教授）、衣笠学長に学長室で頼んで資金を出してもらった。３万円？で1200部を発行した。

◎昭和31年３月入学試験当日模範解答を試験終了と同時に販売したが、よく売れた。また合格発表の電報も受付け、総務委員会資金とした。その後入試問題集を学友会で販売したが、学校に取り上げられ、学校で販売しだしたとか聞いている。

◎「昭和」は、昭和薬科大学各部紹介、学園生活研究部門が掲載（昭和56年、第22号で廃刊）

先輩方にお願い

D－6　昭和33年卒

この度、昭薬会報創刊号が発刊されたことは、私達在校生にとり発展と充実をあらわすものと喜んでいます。私達は入学当時から諸先輩方の社会的活動に終始関心をもって見守っております。私達は実際の世の中からほぼ隔絶している中で現実の社会を割り出す事は夢の如きものです。将来への洞察や企画性を求めています。それ故にこの機会に在校生から諸先輩方に渇望する事は後輩に道標を与えて卒業させてほしいと思います。また、親睦をはかる意味に於いても年１回の在校生を混じえた会を開催いただければと思います。

（昭薬会報創刊号より）

D－6　昭和33年卒

在学当時（昭和29～33）のクラブ活動として「化学部」に属していた。分析化学の実習が行われていた平屋の実習室の一郭に1.5坪の部屋があった。「化学部」では清水辰太教授（海軍薬剤中将出身で一見寄りつきにくい感じがしたが大変真面目な先生で研究者）に放課後特別に当時はやりの「有機電子論」をお願いして部員に講義をして頂いた。大変懐かしく思い出される部活動だった。現在は「有機化学部」としてアクティブに活動しているとのことです。

昭和女子薬学専門学校時代のクラス会

専門学校卒業生全員が集まるという「同窓会総会」が開かれた記録は見当たらないが、各卒業期のクラス会は、ユニークな呼称をつけて、それぞれ活発に行われていた。例えば、Y－2昭和6年卒は≪皐月会≫、S－1昭和7年卒は≪金蘭会≫、S－2昭和8年卒は≪ヒヨス会≫、S－3昭和9年卒は≪つばさ会≫、S－4昭和10年卒は≪みどり会≫、S－5昭和11年卒は≪昭会≫、S－6昭和12年卒は≪むつみ会≫等々…。

第1回目のクラス会を開いた時期は以下の通りであった。

Y－1　昭和5年卒

昭和48年6月10日、卒後43年にして第1回クラス会を長野県白樺湖畔、諏訪校舎山荘で開催、出席者31名、招待者桑原静江氏、荻原光太郎氏。

S－7　昭和13年卒

町田キャンパス移転後、大学新校舎見学を兼ねて、平成2年10月19日に卒業以来52年振りに第1回のクラス会を新校舎で開催した。出席者6名、学内を見学して昭薬会館に宿泊、素晴らしい施設で感激した。クラス会を“瑞穂会”と命名した。

S－8　昭和14年卒

昭和56年4月27日、卒後41年目のクラス会を“木曾路巡り”で開催。出席者13名。“浮世会”と命名。

S－9　昭和15年卒

昭和55年10月15日、卒後40年目のクラス会を箱根湯本温泉雅光園ホテルで開催。14名出席。会の名称は“いちご会”。

S－10　昭和16年卒

昭和36年5月21日、東京渋谷、“味の魚河岸”にて第1回のクラス会開催。出席者11名。工藤祐治先生と平野四郎先生を招待。

S－11　昭和16年12月卒

第1回のクラス会は昭和17年6月7日(日)、東京渋谷の白十字に於いて正午より開催。出席者は31名。恩師、工藤祐治先生、関口英策先生、楠瀬秀雄先生の3方を招待した。クラス会第2回目は昭和28年に新宿御苑で開催、以後毎年開催。

S－12　昭和17年9月卒

昭和34年5月10日、東京自由ヶ丘の藪伊豆で級友故人を偲んで13人集まったのが最初と思う。次回に平野四郎先生（有機化学）を招待して15人集まった。以後、会の名称を“ひまわり会”と命名して毎年10人前後集まっている。

S－13　昭和18年9月卒

昭和38年6月22日、箱根湯本温泉ますとみ旅館で第1回クラス会開催。18名出席。

S－14　昭和19年9月卒

昭和38年9月、横浜中華街で第1回のクラス会を開催、出席者16名、会費1,000円。“希望の集い”と命名。

S－15　昭和20年9月卒

第1回クラス会を昭和22年6月15日、東京目黒の守屋会館で開催。出席者30名、松井きくえ先生を招待。“七草会”と命名して以後毎年開催。

S－16　昭和21年9月卒

東京世田谷校舎における最初の卒業生である。第1回クラス会を昭和21年12月1日に東京目黒の守屋会館で開催。約50名集まった。クラス会の名称を、平和を祈願して“白鳩の会”と命名した。

S－17　昭和22年卒

昭和30年、東京上野すえひろで23人が集まって第1回のクラス会を開いた。招待した恩師は福沢富美先生、工藤祐治先生、里村先生の三方。クラス会の名称を“いずみ会”として以後毎年開催。

S－18　昭和23年卒

東京世田谷校舎のY館（図書館棟）の教室で最初のクラス会を開いた。以後、茶室を利用した事もある。最近15年間は毎年開催。

S－19　昭和24年卒

昭和37年4月にクラス会開催の記念写真があるので、この時が第1回目であろう？。以後昭和50年まで1年間隔で開催したが、これ以降は毎年6月に開催している。昭和58年12月に文集を発行した。クラス会を“りんどう会”と命名している。

S－20　昭和25年卒

昭和49年6月2日、東京上野の東天紅で27名が出席、卒後24年の間、小さな呼びかけをして集まったのが10回程ある。

昭薬同窓会初代会長あいさつ

昭薬同窓会の誕生

S－12　松永　田鶴江

母校創設の歴史を知っているということ周囲の協力で成就した建学の精神の継承並びに感謝のため初代の同窓会会長を引き受けることになった。

私の姉佐藤千鶴江は、昭和女子薬学専門学校一回の卒業生であり、学生の一人として、昇格資金獲得と勉学の苦労の無理がたたって、免許取得直後に他界した。また父も父兄として熱心に創学に参加したことなどがあって、私はその意志をついで年を経て入学をした。卒業後、目黒校舎が空襲で焼失した時、S－19回生の奮起に促され、昭和27年影山同窓会長の下で「昭薬会」として母校復興と大学昇格のため募金を開始した。ところが昭和33年大学は非常に隆盛になった勢いにのって、独自に大学同窓会会則をつくり、「大学卒業生のみ正会員で、旧専門学校卒業生は役員会の議を経て準会員となることができるとした。そこで昭和34年第1回大学同窓回開催の折、出席した私は挨拶して「専門学校あって初めて大学が生まれるのでしょう」とかみついた。専門6回生の活躍もあってこの総会は流れた。次回は全員一致で植草氏（D－1）を会長に推したが、当時大学は財団紛争のあと裁判所より派遣された方たちの支配下にあった。桑原氏も中に入り、事情混迷のまま辞められた。母校も五里霧中の時代であった。

その後改めて新旧合同し一体化した。「昭薬同窓会」の誕生となるのである。

多くの方に護られて運の良い母校の発展を無比の喜びとする次第です。

歴代の昭薬同窓会長

初代会長	S－12	松永田鶴江	
2代	S－6	渡辺タカ	
3代	S－13	藤井英子	
4代	D－1	丸山英雄	
5代	D－2	藤原　隆	
6代	D－5	金沢輝栄	
7代	D－1	小沢　博	
8代	S－11	根津とよ子	
9代	D－3	宮城雅晴	
10代	D－3	藤本琢憲	
11代	D－5	宮澤一成	

資料提供者

Y1	三浦ふみ		金山マスエ	S14	高見千鶴子		加島慶子
	新海うつの		坂上とし	S15	渡部純子	D1	飯田郁子
S1	田中リン	S8	竹中千景		城　寿子		植草　茂
	影山とよ	S9	高橋尚美	S16	呉　明子		小沢　博
	赤堀綾子		橋本よしみ		佐貫房子		丸山英雄
S4	伊藤まさ		北嶋照子		近藤美栄子	D2	藤原　隆
	堀川光子		千葉定子		内田弘子		松浦　譲
	武田きみ子	S11	鈴木文子		高橋成子	D3	永井育三
S5	八木節子		根津とよ子	S17	大野昌子	D5	小林　健
S6	庄司　静		清水光子		植松辰子		飯田好一
	沖本寿美子	S12	松永田鶴江		野村久江	D6	木嶋敬二
	細木千賀	S13	藤井英子	S19	田中靖子		青木智史郎
	渡辺タカ		市川武子		向後恭子		
S7	古川信子		岩本節子	S20	石井耀子		

参考資料

(1) 昭和薬科大学 ① 35年
〃 ② 40年（黄楊の木の回想）
〃 ③ 50年
〃 ④ 60年
(2) 昭 薬 会 報 創刊号
(3) 昭薬同窓会誌 創刊号
2号 3号 4号
(4) 生きる一号 新海うつの著
(5) 校 友 会 誌 女子薬林
りんどう
薬友会名簿
昭薬
(6) 年史 日本史年表（有精堂 和歌森太郎）
近代日本総合年表（岩波書店）

記念誌編集員

表 紙 題 字 S－12 松永 田鶴江
表紙 絵 S－16 内田 弘子
イラスト 〃 〃
特別協力者 D－6 木嶋 敬二(副会長)
D－8 根本 伸二(副会長)
D－3 藤本 琢憲(常任顧問)

編集委員長
S－16 呉 明子(副会長)
編 集 委 員 S－13 岩本 節子(理事)
S－15 渡部 純子(理事)
D－6 青木 智史郎(理事)
D－12 小林 君江
事 務 局

編集後記

この年史は創設から昭薬同窓会が発足するまでの過程を織り込みました。

この企画を決めましたのが、発行の期日までには日が浅く、資料集め、聞き取り、調査そして編集と一時は期日までにできるかと、危ぶまれました。

皆様からたくさんの原稿や貴重な写真帳をお貸しいただき、特にミニクラス会等を開いて、広く情報や資料を集めて頂きましたことは厚く御礼申し上げます。この沿革史に社会年史を多く挿入したのは、当時の学生、学校との生活を理解して頂くためのものと考えました。

創立が他校とことなり、それが母校の建学の精神となりますので、多く前文に入れました。今年は奇しくも、戦後50年を迎え、経済大国に発展はしましたが、内外からいろいろ問われる時代になりました。わが母校もこの65年の道のりを誇りに思いまた反省もしながら、未来へのゆめの実現を叶えていきたいという思いが一杯です。

正確に記述を残すため資料に忠実を期し、集まった情報をもとにエピソードなどを挿入し、楽しく読んで頂けるよう努力したつもりでおりますが、60有余年前の史実の多くを知ることは困難なことでした。限られた紙面に短時間では到底書き切れるものではなく、カットを余儀なくさせられたことは返す返すも残念でした。また、頂いたアンケートその他の重複部分は前文でまとめました。

素人が編集しましたので、見苦しいことが多々あると思いますが何卒お許し下さい。

ご感想ありましたら、お寄せ下さい。

渉外事業担当 S－13 岩本 節子

〒194　東京都町田市東玉川学園３丁目3138番
昭薬会館内　昭薬同窓会
母校のあゆみ
発行者　昭薬同窓会
会　長　宮　澤　一　成
電話 0427－22－5750　FAX 0427－21－1295
印　刷　所　トキワ美術印刷有限会社
町田市山崎町1025
電話 0427－28－5411